
ゆみひき！

更級優月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆみひき！

【Nコード】

N0888P

【作者名】

更級優月

【あらすじ】

ある田舎町に住む少年、渉。彼は感染例が無い謎の奇病に犯されていた。だが、彼は一高校生として、日々を過ごしていた。このお話は、そんな彼が病気と関わりながら高校生活をエンジョイするものです。

超不定期連載ですので、予めご了承ください…。

一射目！（前書き）

何度も推敲したのですが…相変わらずですね。

ぼちぼち手直しするかもしれません。

あと、次話から弓道要素がちらほらと入ってくるかもしれません。

一射目！

うむ、良い天気だ。

こんな良い天気の日、新しい生活がスタートするとは、俺はなんて幸せ者なのだろうか。

俺こと佐伯渉は、透き通るような青空を見て微笑む。

やはり、青空は良い。

雲一つ無い、青空が。

「くう……」

大きく背伸びをすると、俺の体の全てがこの快晴を喜んでいるように思われた。

「昨日のどんよりとした天気とは大違いだな」

真新しいリュックを背負い道を行く俺は、ぼんやりと口を開いた。

「本当に、予想外だ」

昨日は空一面灰色に染まっていたから、明日もこんな天気になるだろうと諦めていたのに。

この天気は……

「ホント、気まぐれだなあ」

俺は空を見上げ、そう呟いた。

俺が住んでいる波場町はうばという町は、平たく言えば過疎化の進む田舎町だ。

全人口一万一千人という小さな町は荒んで、元気がない。でも、最近少し盛り返してきたみたいで、活気が少し戻ってきている。

ただ、若年層が近隣の大都市に出稼ぎ等で出て行ってしまっているのが、本当の活気が戻ってくることは無いと思う。

それが、今の波場町の課題だと思う。

そんな町であるが、幸いなことに高校が二校ある。

しかも、その高校は、県の中で最も歴史のある進学校なのだ。

必要偏差値も高く、生半可な気持ちで受験すると、100%落ちるほどだ。

だが、俺はそんな波場高校に合格した。

いや、合格してしまった。

これはきっと、運命のイタズラなのかもしれない、と俺は思う。

俺は特に頭のよろしくない、どこにでもいる平凡な一町民だ。

何故俺がそんな高校を受験してしまったのかというと、単なるミスタイプだ。

俺の住んでいる県では、受験票をパソコンで作り、そこに各人の受験する高校名などを打ち込んでいるらしい。

その情報などはあらかじめ俺達受験生が記入するのだが、パソコンに入力する人物が誤って俺の受験高校名の欄に『波場高校』と入力してしまったのだ。

まったく、ちゃんと確認して欲しいものだ。

あの時は物凄くびっくりしたんだからな？

でも、それは今となってはともありがたい。

その誤植があったからこそ、今の俺がいるのだから。

もしかしたら別の高校を受験していたら落ちていたかもしれない。そういう可能性だって否定出来ないからな。

ある意味、俺はラッキーだったのかもしれない。

……と、突然後方から何か大きな音がした。

「ひゃ!？」

情けないが、驚きのあまり、女の子のような声を挙げてしまった。何事かと振り返ると、そこには波場高校の制服を着た上級生（ネクタイの色が違うから、きっとそうだろう）が、乗っていた自転車ごと電柱に正面衝突してしまったようで、「いたた!」と呻きなが

ら倒れた自転車を起こそうとしているところだった。

“何故こんなに明るいの？電柱にぶつかってしまったのか？”

俺はふと考えた。

普通であれば、このような事故は起こらないはずだ。

なのに、この人は電柱に向かって行っただけだから、余所見でもしていたのだろうか？

俺は少し離れた位置にいるかの人に近寄ると、一声掛けた。

「大丈夫ですか？」

すると向こうはこちらに気付き、「見られた！」というような表情を浮かべ、恥ずかしそうに俯いた。そして「うん、なんとか…」と消え入りそうな小さな声で言ったのだった。

“本当に大丈夫なのか……？”

俺は疑問に思ったが、あえて口には出さなかった。

どうせ、口にしたところで得るものは何も無いからな。

上級生と思われる人物は、顔を赤く上気させ、覚束無い足取りのまま去っていった。

そんなことで、俺は上級生を追いかけるような形でその場を離れた。

例の事故があった場所から離れておよそ十分後、俺は波場高校に到着した。

昨日確認したクラスに入り、自分の席に着いた。

この学校では、出席番号は五十音順で決められる。

名前の頭文字が“サ”である俺は、必然的に真ん中の辺りになってしまうのだ。

でも、もうこれも慣れてしまった。

きつとこれは、俺に課せられた使命なのだからな！

そうして鞆の中からお気に入りの本を取り出し、読み始めた。

「あのお……」

突然、誰かが俺に声を掛けてきた。

本に向けられていた視線を上げると、そこには一人の美少女がいた。

「何か御用ですか？」

本を読んでいたのを邪魔されたので、俺は怒り感情を含めて問いかけた。

すると、名前も知らない美少女はハツとして、そして俯く。

その姿を見ていると、俺の中で燃えたぎっていた怒り感情は、次第に鎮火していった。

その代わり俺の関心は、この少女の行動に移った。

何だか、変わった子だなあ…。

心の中でそう呟き、彼女の挙動を見守る。

そのうち、口がもごもごと動き出した。

……む？

何か言いたいのはよくわかる。

でも、そのまま音を発しなければ、いつまで経っても言いたいことは伝わらないぞ？

頑張れ、名前も知らぬ少女よ！

そう心の中でエールを送っていると、漸く彼女の口から言葉おとが聞こえた。

「私と……友達になってももらえないでしょうか？」

「……えっ？」

彼女の言葉は、俺を大いに困らせた。

聞き間違えたわけではない。

確かにそう聞こえたのだ。

俺は聞こえた言葉が間違いではないと信じつつ、口を開いた。

「こんな、女みたいな気持ち悪いヤツと友達になりたいの？」

「はい」

謎の美少女は即答した。

「ウチ、とっても貧乏だよ？ それでも？」

「はい」

また即答。

「そのうち、本当に女の子みたくなっちゃうかもしれないけど、それでもいいの？」

「うっ……、は、はい」

ちよつと躊躇つてたけど、ちゃんと答えた。

むう……そこまで言うのであれば仕方ないか。

「それじゃあ、これからよろしくな。俺、佐伯涉って言っんだ」
簡単に自己紹介をし、右手を差し出した。

まるで美白でもしているのではないかと疑うほどの真っ白な手に、彼女は戸惑っているようだったが、

「私、夢野明日香ゆめの あすかです。よ、よろしくお願いします」
ハッキリとそう言い、同じく右手を差し出してきた。

もちろん、俺はその手を握り、「よろしく」と一言。

彼女、夢野明日香は、恥ずかしそうに微笑んでいた。

一 射目！（後書き）

2011年1月30日：構成を少し編集しました。

2011年3月6日：構成を変更しました。

2011年3月26日：前書きを一部削除しました。

二射目！

高校生活にも慣れてきた頃、おっとりとした外見の担任が、帰りのHR中にふと、こんな事を言った。

「みなさん、今日から部活動見学が始まります。興味のある部活などがありましたなら、各自その部活の活動風景を見に行つて下さい。もし可能であれば、部活体験をするのも良いと思います。……連絡は以上です。それでは、さようなら」

「さようなら」

そついうわけで、HRはお開きになった。

鞆の中に、今日の授業で使った教科書とノート、そして配布物の類をしまっていると、例の少女、明日香がこちらに近付いてきた。そして、「ちよつと時間ある？」と尋ねてきたので、俺は「あるけど……」と曖昧に答え、彼女の次の言葉を待った。

すると、彼女はサバンの真ん中で、辺りを警戒するミーアキャットのようになりを見回し、声を潜めて言った。

「さっきの先生の話、聞いてた？」

もちろん、聞き逃すわけがない。

俺は首を縦に振る。

彼女は、それなら話が早いとばかりに言葉を続けた。

「それならさ、今から一緒に部活見学行かない？」

「えっ!？」

突然の誘いに、俺はどぎまぎする。

そりゃあ、当然だろう。

まだ知り合つて数日しか経っていないのに、クラス……いや、学年でもかなり高位に属するほどの美少女から、「一緒にしよつ、行こつ」という誘いを受けたら、きつと誰しも俺のような反応を示

すに違いない。

しかし、答えはもうすでに決まりきっている。

明日香のような可愛らしい少女の誘いを断ることなどできようか。結局、俺は彼女に「行くか」と短く一つ返事をしたのだった。

それから、俺と明日香はしばしの間、どの部活を見に行くかを決めるために話し合っていた。

俺の希望は、基本的に物静かで、活動日数の少ない部活。

だが、明^{めい}浄^{じょう}な心を持つであろう彼女の希望は、和気藹々（わきあいあい）としつつ、時に厳^{げん}肅^{じゆう}な、活動日数の多い部活。

全くの正反対であったこと、そして、互いに譲り合わなかったことが話し合いを長引かせた。

しかし、最後の最後で俺が折れたため、彼女の希望するような部活を見学することになった。

そうしてやってきた、弓道部。

学校の敷地の隅にあり、いつも日陰にあるような感じがする。

……というか、ここに人がいるのだろうか？

「明日香、本当にここであってるのか？」

木立に囲まれた中に、ひっそりと建つそれからは、人の気配が全く感じられない。

しかも、木立の中に人一人座れるくらい大きな石が置いてあった。

俺はここで本当にあっているのかどうか不安になった。

しかし、彼女は頑と譲らない。

「でも、先生に聞いたらココだって言ってたよ。だからここで合ってるんだよ、きっと」

「きつと」って、先生に聞いたのに確証は無いのかよ。

……でも、分かっているのなら、何故扉を開けて中に入ろうとしないのだろう。

「んじゃ、入れば？」

彼女に問うと、「ちよっと、それは……」と、お茶を濁そうとする。

かといって、俺が中に入ろうとすると、「ちよっと待って！」と引き留めようとする。

一体、明日香は何がしたいんだろう。

しばらく弓道場の前で言い合っていると、突然、後方から声がした。

「何してんの？　もしかして、部活見学者？」

その声にぎよっとして振り返ってみれば、一人の長身の先輩と見られる男性が立っていた。

明日香は彼を見ると、口をパクパクさせて、何かを言おうとしていた。

しかし、残念ながら肝心の音が出てこなかった。

そんな明日香の代わりに、俺が口を開いた。

「はい。部活を見学したいのですが……。弓道部はこちらで宜しいんですよね？」

そう問いかけると、先輩とおぼしき男性は、「ああ、そうだ」と、嬉しそうに言った。

そして、「それじゃあ、ついてきて」と言っ、建物の扉を勢い良く開けた。

扉を開けると、中には2、3人の上級生がいて、各自部活の準備をしていた。

しかし、俺と明日香を率いるようにしてやってきた長身の男性に気が付くと、それぞれの作業を止め、口を開いた。

「こんにちは、部長」

小柄な女性が、長身の男性のことを“部長”と呼んだ。

……ん？ 部長？

「あ、あの……」

俺は部長と呼ばれた男性を、恐る恐る呼び止めた。

彼は「ん？ 何だ？」とこちらを振り返った。

俺は指をゆつくりと彼に向け、言った。

「ぶ、部長？」

直後、彼は頭の上に疑問符を浮かべていたが、俺の言った言葉の意味を理解したらしく、自らを指差し、言った。

「うん。部長」

優しく微笑むその姿、将に仏様。

俺は指を指した無礼を詫びたが、部長さんは笑って許してくれた。なんとも優しいお方なのだろう……。

「ねえキミ、ちよつとこれ着てみ」

ぽわ／＼としていると、突然後方から声が掛かり、何かを渡された。

よく見てみると、それはこの学校の女子制服＆黒のストッキング。俺はビックリして、これを渡してきた人物を見た。

すると、そこにいたのは、耳が隠れるほどに伸びたボサボサの髪を持つ、知的なメガネの男性だった。

……おい。キャラが合わないぞ。

「ナオ、一年生君が可哀想じゃないか。そういうことは流石にやめろよ」

その様子に気が付いたのか、部長さんが知的メガネにそう注意した。

すると、知的メガネは「別にいいじゃねえかよ」と言い、渋々俺から女子の制服＆黒ストッキングを取ると、自信の物であるらしい鞆にそれらをしまい始めた。

……っーか、私物かよ！

何故に女子の制服を持ち歩いているのだろうか。

人は見かけで判断するものではないと、俺は改めて思った。
隣でずっと黙り込んでいた明日香も、小さな声で「きもつ」と呟
いていたのだった。

俺と明日香は、部長さんに「部活が始まるまで少し掛かるから」と
言われて、座布団を敷いて、矢を射る場所（部長さんに聞いたと
ころ、「射場」というらしい）の壁際に座っていた。

その間にも、続々とやってくる弓道部の先輩方。
きつと、ちやほやされるのであるうと思っていた俺は、覚悟を決
めていたのだが、その人達の反応は大きく分けて二つあった。

一つは、部活見学者である俺達二人に群がる者。
もう一つは、俺達の来訪を喜びながらも、的をついたり部活を
始められるように準備をする者。

俺としては、前者の先輩方ははつきり言って迷惑だった。
だって、「肌スベスベだね!」とか「女の子みたい!」とはしゃ
がれたら、少しイラッとするからね。

でも、相手は先輩。
俺は作り笑いを浮かべて、ただ我慢するしかなかった。
その間にも準備は着々と進み、ようやく弓道部の部活が始まった。
それにしても、始まる前に神棚に礼をしていたけど、あれって何
なんだろう?

弓道は武道の一つだから、やっぱり礼に始まるのかなあ……。

「ねえ、佐伯君」

ふと、名前を呼ばれた。

こんな時に声を掛けてくる人物はここには一人しかいない。
俺が明日香を見ると、彼女はジェスチャーで「耳を貸せ」と言っ
ていた。

それに応じ、のっそりと近寄ると、彼女は俺の耳に口を近付け、
小声で話し始めた。

「これって、ここにいていいのかな……？」

俺は彼女の言いたい事の真意が分からなかった。

「つまり？」

聞き返すと、彼女は特に怒り出すこともなく、先程の言葉に補足的に言葉を追加し、言った。

「だから、部活中にここにいていいのになってこと」

なるほど。確かにそうだな。

でも、部長さんは何も言わないし、他の誰も何も言わないし……。

「静かにしていれば良いんじゃないかな？」

俺がそう言っていると、彼女はこくりと頷いた。

部活が始まってみると、とても迫力があつた。

弓に矢をつがえる時の音。

的を睨みつけるように見る姿。

弓を引き、じつと構える様。

そして、パツと矢を放ち、その矢が的に当たったのであろう音が

して、“よしっ！”という大合唱。

「格好良すぎる……」

思わず、そう呟いていた。

隣で座っていた明日香が、相槌を打つように言った。

「そうだね。私も弓道部に入ったら、格好良くなれるかな……？」

「うん。きつとなれると思うよ」

そう彼女に語りかけたのは、部長さんだった。

明日香はちよつと困惑したような表情を浮かべる。

それを見た部長さんはまた優しく微笑み、明日香だけでなく、俺にも聞かせるように言った。

「波場高校弓道部は、君のような憧れを持つ素直な人を待っているからね。いつでもおいで」

そう言って、部長さんはどこかへ行ってしまった。

俺は不覚にも、部長さんの言葉を聞き、恋する乙女のようにときめいてしまった。

それから約一時間後、部活動見学は無事に終わった。

俺は今、自宅に向かって明日香と共に歩を進めている。

実は、明日香の家は俺の家の近くであったことが判明し、こうして二人で帰るようになったのだ。

遠くの夕陽を見つめながら、俺は明日香に問いかけた。

「なあ、明日香は弓道部入る？」

「えっ!？」

俺の突然の問いかけに驚いた様子の明日香だったが、「うーん」と唸り始めた。

そして、十数歩歩いた所で彼女は逆に「佐伯君は？」と問い返してきた。

俺は特に驚くような素振りも見せず、「ん？」と短くそれに応えた。

そして、少し考え込み、決めた。

「俺、弓道部に入るよ」

明日香は、俺の答えを聞いて「本当に？」と呟いた。

俺が「うむ」と言うと、また「ぐぬぬ」と唸り始めた。

しかし、俺はそんな彼女をあまり気にしない。

答えが出るのをゆるりと待つだけだ。

もうそろそろ家に着くという辺りで、明日香の唸りが止んだ。辺りに聞こえるのは、哀愁感漂う鳥の鳴き声のみ。

“ 静かだ…… ”

俺は心の中で呟き、歩を進めていた。
が、

「佐伯君！」

突如、明日香が大きな声で俺を呼び止めた。
のっそりと振り向くと、明日香が瞳の中に強い意志を宿しているのに気付く。

「どうした？」

俺が問いかけると、彼女はより眼力を強めて言った。

「決めたわ」

「何を？」

即答で切り返すと、彼女はその顔に笑みを宿した。

そして、束の間の沈黙の後、はつきりと言った。

「私も、弓道部に入る」

その夜、辺りは静寂に包まれていた。

ぼんやりとするには、最高の夜だ。

そして、俺はあることを考えていた。

それは、あの時、何故彼女が笑ったのかということ。

どうして笑ったのだろう。

もしかして、何か良からぬことでも考えているとか……？

俺はその考えを否定するかのように首を振り、布団を頭から被った。

二射目！（後書き）

遅くなりました…。

今年中に、何とか更新することが出来ました。

来年も、ちゃんと推敲して頑張ります。

評価は随時待っているので、宜しくお願いします。

感想なんかも、気軽にお願いしますね。

ではでは。

2011年3月6日…構成を変更しました。

2011年3月18日…内容を部分的に追加しました。

三射目！

弓道部に正式な形で入部するまでの間、俺と明日香の二人は連日のように弓道場に通った。

先輩方や部長さんには『仮入部』という形で活動に混じっても良いと言われたものの、最初はさすがに遠慮した。

しかし、結局折れて活動に参加し、今や部の一員と化していた。

そして、今日。

担任教師が帰りのHR中に、重要な連絡だと前置きして口を開いた。

「みなさん、今日は部活動結団式が行われます。この式によって、正式に部の一員となるので、部活動に入部する人は忘れずに行くようにして下さい。ただ、各部ごとに場所が違うので、十分注意するように。……詳しくは、この紙に書いてあるので、後で見るようにして下さい」

担任は、みんなに見えるように紙を片手に持ち、高く掲げていた。だが、俺はそれを拝むことが出来なかった。

というより、字が小さくてここからでは見えない。

仕方ない。後で見に行くとするか。

ピンと伸ばしていた背筋を、いつもの若干猫背気味のそれに戻す。俺はつくづく思う。“やはり、この姿勢が一番楽だ”と。

「起立！」

「っ！」

突然掛けられた号令に俺は狼狽^{うろた}え、勢いよく机に膝をぶつけてしまった。

机はガタンと音を立てて揺れ、俺は膝にやってくるやんわりとした痛みを紛らわせるため、片手でそこをすりすり。

「いてえ……」 呻くように呟けば、教室内が爆笑の渦に包まれた。

「佐伯君、慌てすぎです」

あの担任でさえ注意するわけでもなく、生徒と共に腹を抱えていた。

そんな姿を見ていると、胸の奥から得体の知れない「なにか」がこみ上げてくるのを感じた。

と同時に、両耳、顔が熱を帯び始めた。

俺はそれの正体が「羞恥」だと知るや否や、顔を伏せた。
その後も、クラスはしばらくの間笑いに包まれていた。

かれこれ10分が経過した。

ようやくHRが終わり、みんなが帰り支度を始めた教室内は、先程とはまた別の賑やかさに包まれている。

俺もみんなと同じように机の中から勉強道具を取り出すと、ここに置いていく物、持ち帰る物にそれぞれ仕分け作業を開始。

「佐伯君、なにしてるの？」

手を動かしていると、どこからともなく声が掛けられた。

ゆったり顔を上げてみれば、明日香が立っていた。

「なんだ、明日香か……」

“なんだ”とはなによ？」

「別に……」

彼女は探るように俺を見ていたが、そのうち一つ溜息を吐いた。
その姿はまるで、泣き喚く乳児をやつとの思いで寝かしつけた母親のようにくたびれていた。

「どこか具合でも悪いのか？」

声色を少し変え、俺は彼女に訊ねてみる。

すると、明日香は机の前でしゃがんだ。
目線が机の上10センチぐらいになる。

俺はそそくさと机上の教材を鞆にしまい込むと、彼女が口を開くその時を待った。

何かをためらうように、視線を泳がす彼女。その様子を見ているうち、一つの考えに行き着いた。

しかし、それを口に出して、彼女の機嫌を損なわないだろうか。考えた末に、俺は“一人で結団式の場所に行きたくない”という主旨を隠すため、オブラートに包むような形で言った。

「もしかして、“あれ”か？」

すると、明日香は“あれ”の指し示す事を勘違いしたのか、顔を赤く上気させた。

「ち、違うよ……」

彼女はそう否定して、「バカ」と付け加えた。

何故「バカ」と言われなくてはならないのか理解に苦しむが、訳も分からず沸き出してくる罪悪感に押され、「ごめん」と一言謝罪の言葉を口にした。

その後、俺は明日香に事情を説明して、拗れた空気を修復することに成功する。

俺と彼女の間に、深い溝が生まれなくて良かったとつくづく思う。

（ここで仲が悪くなったら、後々厄介なことになっていたな……）

「なにか考え事でもしてるの、佐伯君？」

「わっ！」

どうして俺はこんなにも“突然”に弱いのだろう。

「ほんと、佐伯君ってビックリ症候群だね……」

そのせいで、変な病名を突きつけられる。

……まあ、実際変な病気に罹ってはいるんだけどね。

「でさ、私たちが行く場所ってどこだっけ？」

「ん？ 弓道場だよ？」

さっき確認したから、これには自信があるぞ。

「じゃあさ、何分までに行くんだっけ？」

……。

明日香、君は紙を見た？　しっかりそこに書いてあるのに。

「3時45分までに……」

そこまで言って、時計を見た。

「ッ！？」

本当に焦った。

現時刻は3時38分。

歩いて弓道場に間に合うように着くなど、到底無理だった。

「明日香、急ぐぞ！」

そして、俺たちは走り出した。

相変わらずの陰鬱さを醸し出す、この波場高校弓道場。

前来た時は分からなかったが、入り口手前の木立の中に、小さな池があるらしい。

それほど広くはないものの、鯉が数匹いると、部長さんが教えてくれた。

「でな、その鯉にエサをやるのは一年生の仕事なんだわ」

「えっ！？」

「ははっ。大した事じゃないがね。単にこいつを池にばらばらつと撒けばいいだけさね」

いつの間にか、部長さんの右手にはペットショップでよく見かける『鯉のエサ』が握られていた。

普通なら、これは弓道場にあるはずのないものなんだけどな……。と、部長さんがいないことに気付いた。

辺りを見回すが、部長さんの「ぶ」の字も見えないわけで。

「なあ、明日香。部長さんどこ行ったか分かる？」

すると、彼女は無言のまま、ある一点を指した。

それを辿ってみれば、確かに部長さんがいた。

弓道場の、屋根瓦の上に。

「ぶ、部長さん！？ なにしてるんですか！？」

瓦の上に寝転がり、空を仰ぐ部長さん。

彼は俺の声に反応して、上体を起こしてこちらを見た。

「なにさ。ここは俺の特等席だからな。のんびりしてるだけさね」

「……」

これには驚いた。

隣を見やれば、明日香も驚いて口をあんぐり開けている。

それに反し、部長さんは「今日は良い天気さね…」と大きく背伸びした横になると、そのまま心地よさそうに寝てしまった。

「……」

……部長さん、危機感なさ過ぎですよっ！

「少し遅れたけど、これから結団式を始めるさね」

欠伸あくびをしながら、さも眠たそうに宣した部長さん。

時刻は午後4時5分。

少しばかりでない。かなり遅れている。

原因は明らかだった。それは単に部長さんが寝過ぎたためだ。

そのせいか、今にも眠ってしまいそうな表情を浮かべて座っている。

さらに、進行の仕事も二年生の先輩にバトンタッチしてしまった。本当に部長さんは自由な人だなあ。

「さて、始めに顧問の……」

こうしている間も、着々と進んでいく結団式。

「ねえ、佐伯君」

「ん？」

よし、今回は大丈夫だった。

突然の声掛けだが、慣れてきたのか、俺は至って一般的な返事をする事ができた。

「自己紹介みたいなの、どうする？」

「うーん……。特に考えてない」

「ぶつつけ本番ですか？」

「うん。そうなるかな」

そこで明日香は、少し考えるような素振りを見せた。しかし、すぐに口を開いて次を繋げた。

「それじゃ、私もそうしようかな？」

右手で口元を押さえ、自然に微笑む彼女を見てみると、俺までも微笑んでしまう。

「うん、それがいいと思うよ」

そう告げ、彼女とのプチ会議はお開きになった。

「では、各自自己紹介をしてもらいましょう」

部長さんから進行を仰せ付けられたら二年生の先輩。彼は厳肅な中に少し茶目つ気を織り交ぜて言った。

そして、彼はゆったりと部長さんの所へ歩み寄り、先の俺と明日香がしたような小会議をしていた。

しかし、それはすぐに終わって、彼は再び正面に戻ってきた途端に口を開いた。

「自己紹介の方ですが、一年生からということになりました。では一年生、どうぞ！」

いや、いきなり「どうぞ！」とか言われても困るし。

一年生は全部で5人。その誰もが立ち上がるうとはしなかった。その様子を見かねたのか、部長さんが気怠けたるそうな口調で言った。

「んだら、1組の出席番号が早い順から発表すればいいさね」

彼の言葉を聞いたあと、一年生5人は無言ながらも、「誰だよ、最初に発表するヤツは」的雰囲気をはひしと出し始めた。

……ん？ 待てよ。

たしか1組と2組の人はここにいないはず。3組は俺と明日香の

2人だけだから……

最初に発表すんの俺じゃん！

「はあ……」

溜息を吐くと、仕方無く立ち上がる俺。途端、先輩たちが「おつ」というような表情を浮かべ、変態知的メガネ先輩はニヤニヤしていた。

“大丈夫。普通に話せばいいんだ”

先程まで進行の二年生がいた辺りで振り返る。

みんな、俺のことを見ている。

……ダメだ。凄く緊張してきた！

“みんなジャガイモ、レタス、人参、カボチャ……”

何度も頭の中で呟き、俺はようやく口を開くことができた。

「い、1年3組の佐伯渉です。と、特技は……あっという間にどこでも寝れることです。こんな俺ですが、よ、宜しくお願いします！」

言い終えたら、凄まじいほど恥ずかしさがこみ上げてきた。

すぐさま俺は、もといた場所にダッシュで戻ると、真っ赤になっているであろう顔を隠すように俯いた。

そんな事をしている間に、明日香が立ち上がって離れていき、自己紹介を始めた。彼女は自己紹介を大きな声で、そして相手に分かりやすくハキハキと行っているのが聞いていて分かった。

顔を上げてみれば、時折身振り手振りを加え、流暢に話している。

“明日香、発表上手だな……”

程なくして、彼女は自己紹介を終えてこちらに戻ってきた。

「ナイスだったよ、自己紹介」

隣に座った明日香にそう声を掛けると、頬をほんのり朱に染めた彼女は、ぶっきらぼうに「ありがと」と呟いた。

その後も快調に進んでいった自己紹介。

あつという間に最後となり、トリを飾るのは部長さんだ。

未だ眠たそうに目を擦り、のっそりと立ち上がった。

スローペースで正面までやってくると、彼は一つ欠伸をして話し始めた。

「えー…俺、部長。またの名を御堂貴久みどうたかひささね。気軽に“御堂”でも良いし、“部長”でもいいから。よろしくな」

言い終えた途端、大欠伸。そして自ら「自己紹介終わりー」と宣し、もといた場所へと戻ってしまった。

なんというマイペース。

「で、では、これにて結団式を終わりにします」

先程まで座していた二年生の先輩が、前に出てきてそう告げた。すると、幾分場の雰囲気が和む。

「佐伯君」

「ん？ なに？」

明日香の声に反応して彼女の方を向くと、片手がこちらに差し出されていた。

「これから頑張ろうね？」

彼女の言葉で、俺は理解した。

「うん。頑張ろう！」

頷いて、俺は彼女の手を握り返す。

今日から俺たちは、波場高校弓道部に正式な形で入部した。

俺はその場で立ち上がると、ひとつ大きく深呼吸。

すると、心の中に何かが芽生えたような気がした。

三射目！（後書き）

すいません。かなり遅くなってしまいました。

1月に投稿するはずが、3月になってしまつという非常事態。
遅筆でごめんなさい。

飽きたというわけではないので、ご理解を。
ではではっ。

2011年3月24日：部分的に編集

四射目！（前書き）

遅くなってしまうて、本当に申し訳ありません……。。

四射目！

「よしっ！」

心地良い……というより豪快な音を立てて、放たれた矢が的を射抜く。

「よしっ！」

その度、このような掛け声が道場内に響いた。

本当にかっこいい。これはもう言わなくてもいいくらいに。

「よしっ！」

その間にも、また的中。

この部、とても強かったりして……

ほんの興味本位で、行射を終えた部長さんに訊ねた。

「部長さん、この波場高校弓道部ってどのくらい強いんですか？」

すると、部長さんは声高に笑い出し、その調子のままで答える。

「この辺りでは一番弱いさ。要するに、弱小さね」

……。声が出てこない。

そんな俺の代わりに、明日香が口を開く。

「で、でも先輩方、結構中ってますよね……」

確かに。先程から先輩方は一本も外していない。全員が全員、あ

の小さな的へと、正確に矢を運び続けている。

とても凄い能力を持っているはずなのに、何故、部長さんはそのように言うのだろうか。

と、部長さんは顔にいやらしい表情を浮かべて言った。

「じゃあ、試しに弱小さを見せてやるさね」

そう言うつと、彼は的と対峙している8人の先輩方全員に聞こえるような声で、さも何気ないように言った。「布団が吹っ飛んだ」

その途端、道場内の空気がさっと変わった。

それまでのぴりぴりとした雰囲気解きほぐされ、先輩方の射が乱れ始める。

先程まで全射全中であつたのに、今は全射残念。

「思つたより効果があつたな……」

部長さんも、場のあまりの変わりように少し驚いているようだった。

「貴久！ お前、本当にふざけんなよ！」

「そうだぞ！ せつかくいい感じでいつてたのに……」

「いやあ、すまない。本当にすまない」

先程のイタズラを責められ、すっかり小さくなつてしまつた部長さん。しかし、その態度に反省の色は見られず、怒っている他の先輩方の反応を楽しんでいるようだった。

そんな部長さんの態度に呆れた二人の先輩は、何の前触れもなく俺たち一年生を呼び集め、小さな声で話し始める。

「いいか。お前たち一年生は、貴久あんなやつみたいにはなるんじゃないぞ」

「は、はいっ！」

あまりにも恐ろしい声に、何人かが震えている。先輩はそれを見ると、どこか申し訳なさそうに顔をしかめて静かにその場から姿を消したのだった。

それからもう、部活というよりも、恐怖政権下の国民と君主とといった具合だった。明日香は一言も喋ることなく、黙々と仕事をして先輩方の練習風景を見ている。少し横目で見てみると、彼女は自分からというよりは、何か恐ろしいものに脅されているように見えて仕方がない。

“ やっぱり、さっきの先輩の影響なのか…… ”

仕事をこなしながら、ぼんやりとそう思った。

部活が終わつた。

“ 無事 ” という言葉は、到底使える状態ではない。なんせ、あの後部長さんは左頬に湿布を貼り、いかにも痛々しい姿で弓を引いて

いたのだから。

「日向に殴られた^{ひゅうが}」と言っていたから、きつと一悶着があったのだと思う。

そんなこんなで、弓道場の外。

俺と明日香は帰り支度を済ませ、ほとりにしゃがみ込んで、池の中を泳ぐ錦鯉をぼんやりと眺めていた。

「ねえ」

突然、明日香が口を開く。「なに？」と返すと、彼女は声を潜めて囁く。

「御堂部長、だいじょうぶかな？」

「どうだろうね。あの調子だといじょうぶそうだけど……」

狭い池の中を、悠々と鯉が泳いでゆく。

「でも、部長さんは部長さんで悪いよね」

「うん。確かに」

「先輩方、かなり怒ってたからな……」

「先輩、ちよつと怖かったよね」

「怖かった。俺、背中に嫌な汗が流れたよ」

俺たちを気にすることなく、鯉は楽しそうに水中で踊っている。

「明日、ちよつと行き辛くない？」

「そうかな。今日は今日、明日は明日って割り切っちゃえばいいんだ。気にすることは無いと思うよ」

「でもなあ……」

明日香が不安げに呟いた時、池の水が空を舞う。そのまま水は綺麗な放物線を描いて、少し離れた場所で同化した。

すいすい泳ぐ鯉の仕業だろうと思っていると、案の定、水面で鯉がはねて、再び水が宙を舞った。

どうやら彼女もそれを見ていたようで、視線は水面に釘付けとなっている。

「とっても綺麗だった……」

うつとりとした瞳で、ぼつりと彼女は呟いた。

「その二人、何をしている？」

突然、静寂を絶つように濁りのないテノールが辺りに響く。俺と明日香がほぼ同時に振り向くと、そこには、俺に女子用の制服を渡してきたあのメガネ先輩が腕を組んで俺たちを見下ろしていた。

「何か池にいたのか？」

そのままの状態で、先輩は口を開く。俺は「いいえ」と首を振ると、先輩は「そうか」と呟き、「遅くならない内に帰るんだぞ」と優しい声で言うと、その場から立ち去った。

「……」

先刻の先輩とは正反対だったため、俺はポカンと口を開けた。もう太陽は西に傾いていて、空を紅葉色に染め上げていた。

遅くなってしまった帰り道。

太陽はとつぷりと頭まで潜ってしまい、街灯が嬉しそうに道を照らしている。

時刻はおよそ、七時頃だろうか。

先程、明日香と別れたから今は一人。微かに吹く風が心地良い。

「ふう」

思わずため息。もちろん、良い意味で。

「帰ったら、星空観察でもしようかな……」

雲一つない夜空を仰いで、そんなことを呟いた。

「ただいま」

言っても誰一人返事をしてくれない。なんせ、両親は共に夜のパートへと出掛けているから。「佐伯家はとても貧乏だから、少しでもお金を稼いで豊かな暮らしがしたい」と、よく両親が言うのを小耳に挟んでいる。

そのため、毎晩俺は一人で夜を明かす。

もう慣れてしまったから、寂しさなんて感じない。

それが当たり前だと、小さい頃から思っていたから。

「今日は何を食べようかな……」

冷蔵庫の中をくまなく探しながら、今晚の食事を考えた。

しばらく考えて、ひとまず悪くなってしまうようなものを処分してしまうことにした。

二日前の煮物を筆頭に、昨日のサラダ、賞味期限の切れたヨーグルトやプリン……。

他の人が見たら、絶対引くな……。

そんな食事をさっさと切り上げて、自室の襖を横に開いて中に入った。

俺の部屋は客観的に見て、とても綺麗な方だと思う。特に散らかっているというわけでもないの、物が行方不明になるということもないし、逆に散らかそうとも思わない。

だいぶ前に友達が遊びに来たとき、「部屋を交換してくれ」と言われたのが懐かしい。

鞆を机の上に乗せ、たたんだ布団を敷いて寝転がった。

視線の先は、なんの変哲もない無機質な天井。毎日見ているはずなのに、今日は少し変わっているような気がしてならない。

「疲れてるのかな、俺」

そんなことを呟いて、上半身だけ起き上がる。少し身体がだるく感じ、今日は早めに寝ようと思った。

風呂上がり。

パジャマに着替えて、カーテンの外の闇を見ていた。

視線を上げると、満天の星空。幾つか知っている星座を見つけて、少し嬉しくなる。

ふと時計を見ると、9時も峠を越したくらいで、電気を付けていない部屋の中は月明かりでぼんやりと明るい。

その妖しい美しさに思わず心を奪われてしまい、しばらくその状態のまま動くことができなかった。

どのくらい時間が経ったのだろう。

はっと我に返って時計を見たら、あれから短い針が2つ移動していた。

室内の雰囲気にも、若干の変化が見受けられる。

“このまま起きていたら、明日の授業に支障が出るな”

そう思い、俺は布団に入って見慣れた天井を仰ぐ。

相変わらずの、無機質なそれ。

何を語るわけでもなく、ただそこにあるだけ。

“もしあいつが喋るのなら、どんな言葉を俺に掛けるんだろう…

…”

首から上を布団から出して真剣にそんな事を考えている内に、睡魔が襲ってきた。

次第に重くなっていく^{まぶた}瞼。薄れてゆく意識。

“もう無理だな……”

そう思い、俺は事の成り行きに身を任せる。

その直後、意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888p/>

ゆみひき！

2011年7月31日07時23分発行